

ヨーロッパの旅 (五)



平井信義

その婦人が、故郷日本に残した子どもには、いろいろな異常行動が現れていることが、年寄りの手紙に記されてあった。

「これが、母からの手紙なのです。お目を通していただけますかしら。母は、しきりと帰国するようにいつてくるのです。」

太く、たどたどしい筆跡で、横文字の宛名が書かれてある航空郵便が、彼女のハンドバッグから取り出され、私の目の前におずおずと差し出された。もし迷惑ならば、読んでいただかなくてもよい——という控え目な気持が、差し出した白い手に感ぜられた。

「拝見してよいのですしたら、読ませていただきますよ」と、ぼくも控え目に手を出した。「何か、私でできることなら、考えてみましょう。」

その手紙をひらいてみると、細々とした字で、ぎっしりと詰めて、孫のことを書いてあった。小学校四年生になるその男の子が、全く年寄りの言うことをきかない。ものが欲しいとなると、それが聞き入れられるまで、しつこく要求する。学校でも、わがままなことをして、先生から困った子どもだと言われる。とにかく、年寄りの力ではどうにもならない段階にきているので、こちら（ドイツ）に連れていくか、一時でもよいから帰国して欲しい。——概略、以上のような文面であった。

読みおえて、彼女のまなざしを見返したぼくに向って、
「帰ってこいといわれても、そう簡単にいくわけがなし、こちらへ連れてきてもどうにもならないし……」と、憂いのある目を伏せた。

「でも、お子さんを、おはあちゃまのところにこのまま置いておくわけにはいかないのではないのでしょうか。」

「そうも思うのですが、おはあちゃんが言ってきていることが、どれほど本当か、私にははっきりしないのです。東京にいました頃も、何かにつけて大げさな話で、私のことを非難するようなことが多かったものですよ。そう思いたくはないと思っても、どうしても、そのことが頭にかんでくるのです。」

「ご主人の側のお年寄りなのですか？」

「そうなのです。こんな話をお耳に入れるのは、なんですけれ

ど、私が結婚に踏み入ったのは、この年寄りの力なのです。私、もっと音楽を勉強したかった。でも、親戚を通して、是非と望まれ、私の両親も大いに気乗りだったものですから……。そして、海外に出たら、私の希望もいれてくれるという返事でしたので、私も決意したのです。」

「ご自分のなさりたいことが、結婚によって実現されると思われたのですね。」

「世間知らずの甘い考えでしたわね。結婚してみると、そんなにのきな話ではないのですね。主人は、全く音楽には興味がないんです。社交的には、ベートーベンのモーツァルトなど申しますけれど、それは本当に社交の手段なのですわね。自分から進んで音楽をきこうともしないし、私のピアノの練習も内心は快く思っていないのですね。それでも、初めは、私が弾いておりまして、うまいだのきれいに弾けただの、ことばをかけてくれましたが、それは社交辞令だったというのは、あとになって分ったのです。私、本当にお人好しだったわ……」

「期待に反したというお気持ちが強いのですね。」

「期待に反した——というものでないのかも知れない……。何て言ったらよいか知ら。何となく主人から気持ちが離れていったのね。そうになると、主人がほめてくれたりすると、何か不純なものを感じて、心が冷たくなってるのね……。主人は、暴力をふるっ

たりいじめたりすることはないけれども、それだけに、もっと冷たいものを感じてしまうのですわ。私自身がわがままでからそう感ずるのかと、何回も思い返してきたのですが、そう思えば思うほど、ますますいけないの……。

その気持をはっきり言えばよかったとも思うのですけれど、言っても、どうともないような気がしてくるの。そのために、一応表面は別にどうということがないけれど、私の気持が凍えてきそうになってしまったのよ。」

「……………」

「こんなお話して、ごめんなさいね。私、こんなことを申し上げるつもりはなかったのですが……」

「お子さんのことをどうしたらよいか、相談したいということですが、私をたずねるお気持にしたというわけですね。」

「あなたに何ええ、何かよい知恵が与えられるのではないか：という気持がしたのです。私、どうしたらよいでしょう。すっきりわからなくなりました。そのために、近頃、ねむれなくて困っているのです。子どもの問題に原因があることはわかっているのですが、結局、どうしたらよいのでしょうか。」

「毎晩、おやすみになれないのですか？」

「そう毎晩ということではありませんが、寝れない日は、一応二時間から三時間ぐらいしかねていないでしょうね。」

彼女は、そのような話をしながら、目をしばたいた。その目の下に濃い、くまどりが、彼女の苦しみを物語っているように思えた。

「具体的な解決方法がなくて、どうしてよいのか苦しんでおられるのですね。」

「実は、私、あまり子どもが好きでないのです。結婚してしばらくは作らないでいたのですが、主人がどうしても一人は作れ！——というのです。その時も、何とはなしに反対したい心が動いたのですけれど、やっぱり、意志が弱いね。決断力がないのね。ずるずると一人生んでしまったの。」

「決定がはっきりしないままに、結婚生活に入られたり、お子さんを作られたというような気持がしておられるのですね。」

「決断する力が弱いのですね。でも、今度は、はっきりと決断しなければならぬ時が来ているような気持に駆り立てられているのですが……」

「決断をするということですね。」

「私は、やっぱり私の道を歩むことがいいのではないか——と思うのよ。それが、子どもにたいして悪いとは知っているのだけれど、自分の気持をいつわることではできないのね。やっぱり、本当に子どものことを思うことができない……」

この時、ぼくはどう返事してよいか分らなかつた。子どもを思

うから、こうして相談にくる気持ちになっていると思う。しかし、音楽の勉強にもきちっと踏み出したいのだろう。ぼくは困ってしまつた。

「私も、混乱してきて、どのように申してよいかわかりませんが……」といいかけると、

「私、本当はご相談すべきでなく、自分さえはつきりと決心をすればいいことなのです。あなたをお訪ねしたのも、先日お目にかかったことから、ふらふらとここへ参つたというわけです。お話ししても、ご迷惑なことでしたのにね。」

「いいえ、お子さんのこととなると、私はついいっしょうけんめいになるものです。どうぞ気がねをなさらないで下さい。何か、お役に立つことならいたします。」

「もう一度考えてきますね。わからないことにはぶつかったら、また、ご相談させて下さいね。」

こうして、子どものことは中途半端に終つてしまつたが、そのあと、音楽の話に花が咲いた。そのような時の彼女の顔付きは、人でもちがうように生き活きしていた。

そのあと、一週間して、再び彼女が現れた。そして、日本へはまだ返事を出していないけれども、自分で何とかするから……と言つていた。再び音楽の話をして別れた。

「本当に楽しかつたわ。心からお礼を申し上げたいくらい。今

度は、私の下宿へおいで下さらない。私が何か作つてご馳走しますから……」と、明るい顔で笑つた。

実は、二人の關係は、そのまま終つてしまつた。彼女からの連絡が途絶えて、下宿を訪問することができなかつたからである。それは、私にはたいへん心残りであつた。相談をうけた子どもがどうなるだろうかという心配もあつた。しかし、それ以上に、彼女が自分の人生にたいして、どのような決定をするだろうか、それを知りたかつたからである。その決定について、何かもつと彼女を援助したい。そして今後は幸福な人生を送つて欲しいという気が覺くしてくるのであつた。

その後、ふと暇があると、彼女はこうしているだろうか——と思うことが多くなつた。日中は、大学のことがかくさんあつて彼女のことを思い出す暇はなかつたが、下宿に帰つてベッドに転がりホツと一息つくくと、彼女が坐つたことのある椅子が目に入つてくる。その椅子に坐つて、夫との關係、姉との關係、子どもにたいする気持などをぼくに打ち明けていろ彼女。それは、ちよつと上目使いにぼくを見、思い迷うとちよつとしばたく目指し、筋の通つた鼻立ち、その下にある小さい口元、そして色白い顔の肌と細い首とであつた。そうした彼女の姿は、毎日のように、ぼくの脳裡に浮び、或いは連絡があるかも知れないと待つ気持になつていた。

そのような彼女の姿は、マールブルクの一人旅を終えてから、すっかり変ってしまった。マールブルクへの彼女との旅を考えるようになっていた。

ちょうど、霧のような雨が降る三月の或る日、彼女と私は、一つ傘の下で肩を寄せ合いながら、マールブルクのお城への坂道を、一步一步ふみしめていく。寒さはまだ厳しく、吐く息がこもこも白い。人々は家の中の煖炉を楽しんでいるのか、人一人にも行き交わない。

「静かねえ」と彼女が言う。

「……」

次第に峻しく、目の前に迫ってくるお城の建物。建物を築いている四角い石の目が、一步一步にはつきりしてくるようだ。高い破風の下に小さな窓がいくつも見える。それが、私たちを招いているようであった。

息がはずむ。

「ちょっと、休みましょう。」

お城に背を向けて、登って来た方向を見下すと、赤い屋根、緑の屋根が煙って見える中から、いくつかの教会の塔がそびえている。それら家々の間を縫うように、ライン河の水面が、これもそれらしく見える程度にかすんで見えている。

「どうとう、来てしまったわね」と彼女が言う。「あなたのお

つしゃるように美しい町だわ。戦禍を受けなかったドイツの町は、このように趣きがあるのね。」

「西ドイツの町々の中で、一番美しい町だと思う。」

「このような町に、住んでみたい。」

「ぼくも、ここへ来るたびに、そう思うんです」

ひと思つくと、二人は再び急な坂道を登っていった。いく度か、右になり左になりしながら、道を辿っていくと、三、四〇米もあろうかと思われるお城の建物の真下に出た。

「高いわねえ。」

尖塔のあたりを、霧が流れていく。しっとりと石の面が濡れている。しずくが、そこらあたりから、ぼたっぼたっ落ちてくるようである。いく度か、それが傘に大きな音を立てた。

二人は、石の門を二つほどくぐって、お城の中庭に出た。

「誰もいないのかしら。」

「誰か番人がいると思うけど。その戸を押してみましようか。」

ぼくは、傘の下から抜けでて、小さな扉を押してみた。その戸が、ぎいっと重くあく。中には暗く、小さな部屋があつて絵葉書などが陳列してあるガラス箱がおいてあつた。ぼくは、振り返って、彼女を呼んだ。

中に入って、石段を上ってみた。彼女がぼくに続いてくる。

「誰もいないのかしら。」

「そうらしいなあ。でも、各部屋を案内するように、矢印がし
てある」

「矢印の通り、廻ってみましょうか。」

「……」

矢印の通りに、いくつかの部屋を抜けると、遂に、チャペルに
出た。キリストの十字架が正面にあり、その方に向けて、何列か
のベンチが並んでいた。

「十二世紀からのお城だから、この部屋も既に六、七百年たっ
ているわけですね。」

「まだ、ゴチック以前のものだから、ずっと簡素で、さっぱり
しているわね」

二人は、誰いともなく、そのベンチに腰をおろして並んだ。
天井を見るときもなく見廻す。高い天井もまた、石で組まれてい
た。ローソク用のシャンデリアが一つ下っている。電灯のない時
代からのものであろう。

「ほんとに、来てよかった。あなたのお蔭よ。あなたに声をか
けていただくまでは、どうしても決心がつかなかった。本当に、
ねむれない日が続いた。でも、ここに来る決心がついた日から、
急にねむれるようになったの。」

彼女は、黒い手袋のまま、その手をぼくの手の上においた。ぼ
くは、その手を手の掌の方に受けとめると、軽く握り返した。そ

して、そのままの姿勢で、何分か立った。何分か何十分かわから
ない。ぼくのころは、チャペルの中で坐っているということをも
忘れかけていた。二人でいるのだという気持ちのみが、胸をかけ廻
っている。その鼓動を感じることが出来る。ぼくは目をつぶっ
て、つき上げてくる感情をおさえていた。彼女の手袋の下で、小
指あたりをきぐると、その指先を強くにぎりしめるということ
で、抑えられた感情が逆り出てくるようであった。

彼女も、じっと目をつぶっていた。そして、過去の数日を思い
出しているようであった。或いは、数年間のことが、走るように
脳裡に映じては消え、消えては映じていたかも知れない。

どのくらいたったか、時計を見る気持もしないままに、時間を
追いやった。突然、彼女の胸元が何回か大きく波立つとともに、
ぼくのからだに倒れかかって来た。ぼくは、そのからだをしっか
りと抱きかかえる。そして、より強く、ぼくの胸元にひき寄せ
た。彼女の唇を、おえつがついてででくる。それが、チャペルの
天井にも、四囲の壁にも伝っていくようであった。

これは、或る日の夕方、ぼくが下宿のベッドで仮睡した時に見
た夢である。ぼくは、この夢を大事に貯えた。そして、思い出し
ては、このマールブルグを美しいものにした。マールブルグは、
ぼくの心の中で、そのような位置を占めている町なのである。